



共同通信



2007年7月11日 131号(341号)

日本基督教団 西宮共同教会月報 〒662-0834 西宮市南昭和町 10-22
0798-67-4691 FAX 0798-63-4044、Email:koudou@gamma.ocn.ne.jp
<http://www.koudou.jp/> 振替 01170-3-4901
ホームページアドレスが新しくなりました。

時代にふり回されるのではない 自分の人生を語ってほしい、
あの時 心を躍らせて生きた 自分の人生を語ってほしい、
後悔に 身をふるわせたこともある 自分の人生を語ってほしい、
笑い 泣き 歯ぎしりをした 自分の人生を語ってほしい、
今日 こんな決意をしたという 自分の人生を語ってほしい

To tell the story 31

『学童疎開で体験したこと』

大東亜戦争(第2次世界大戦)末期のことです。昭和19年(1944)になりますと、日本の旗色は極めて悪くなってきました。大本営発表によれば、我が陸海軍は敵軍(米英)に大損害を与えているということでしたが、用心の為、大都市にいる小学生は全員、地方の安全なところに疎開するようにとの指示が出ました。田舎に親戚とか知人がいる者は、縁故疎開ということになります。田舎がない者は、小学校単位で集団疎開することになりました。私は小学校5年生のときでした。私と小学校1年生の妹の2人は、農業を営んでいる父方の伯父の家に縁故疎開をしました。兵庫県城崎郡香住町香住(現 美方郡加美町香住区香住)が疎開先でした。9月の新学期に間に合うように兄妹2人だけで、列車に乗りました。当時は、福知山線、山陰本線で6

時間も掛かりました。トンネルの多い線で、香住に着いたときには、顔が煤煙で黒くなっていました。伯父が城崎駅まで、迎えに来てくれました。

昭和20年(1945)3月になりますと、大阪大空襲があり、大阪市内に残っていた母と幼い弟・妹の3人が、このままでは、空襲で死ぬ危険性が高いということで、急遽香住に疎開してきました。最初は、小学生2人でしたが、後からは家族5人になりましたので、伯父さん宅と私たち疎開者家族とは別々の炊事をするということになりました。いくら伯父さん宅が農家であっても、お米は供出しなければなりませんから、余分なお米はありません。配給米と闇米を合わせても、お米の量は足りません。食べ盛りの子供が4人もいては、賄いは大変です。一家5人はいつもお粥程度の食事です。いつ

も腹ペコの状態でした。さつまいも、大豆、麦、さつまいもの茎などを入れたお粥を何日間も続けて食べたことを今でも記憶しています。その時は、私は長男ですから、愚痴などは決して言いませんでした。しかし、心の中では、白いご飯を茶碗1杯でも食べられたら、どんなに幸せだろうかと思いました。

終戦（敗戦）は、昭和20年8月15日正午、天皇陛下の玉音放送によって、全国民に知らされました。我家には、ラジオはなく、伯父さん宅にはラジオはあっても、よく聞き取れません。勝ったのか負けたのか分かりません。役場から、伯父さんが帰ってきて、どうやら日本は負けたという話でした。我家では、日本は負ける筈がない、きっと何かの間違いではないかと話をしたことを記憶しています。

終戦の1日前、14日には、香住港の沖合を航行中の貨物船2隻のうち1隻が大爆発により、沈没しました。触雷らしいです。多くの漁船が、遭難者を救助に向かいました。触雷を免れた貨物船1隻は香住港の港内に緊急避難のため入港しました。私も子供たちは15日午前、貨物船の船腹に掛かっている縄梯子をよじ登り、船から飛び込みを繰り返して、遊んでいました。そのとき、一人の子供が、冗談で「敵機来襲」と叫びました。船員は、すわ一大事と、機銃を空に向け、敵機に備えました。子供たちは禪一丁、甲板で遊んでいました。嘘だと分かってからは、船員に叱られて、直ぐに船から追い出されました。近くの小川で塩出しをしてから、めいめい自宅に帰りました。それが終戦の日でした。

今、香住港が見える岡見公園に、当時殉職された船員さんの慰霊碑が建てられています。終戦の1日前に亡くなられた方が居られたことは忘れてはならないと思います。当時は、報道管制が敷かれていましたから、新聞やラジオでは、報道されませんでした。

私達親子5人は、9月に大阪に引き揚げました。そのとき私は小学校6年生、妹は2年生になっていました。1年間香住でお世話になりました。伯父さん宅には、私達が引き揚げたあと、置き土産に南京虫を残しました。大変、迷惑を掛けてしまいました。どのような、お礼やお詫びをしたのか、ついに聞きそびれたまま、両親は他界しました。伯父さん伯母さんも他界しました。お礼もお詫びも、どうしたらよいか、分からない位大変お世話になりました。敗戦後、食うや食わずの生活に追われていましたから、自分たちが生き残ることだけしか、考えずに日々を過ごして来たのではないかと、反省しています。

大阪に居残っていた父が経営していた工場は、空襲に備えて、豊中市にある安全だと思われる土地に、機械器具一式を疎開していましたが、3月の空襲のときに全焼しました。大阪市内の自宅は奇跡的に焼け残りました。皮肉な結果になりました。戦後は一家揃って、裸一貫で再出発しました。私が疎開前に学んでいた玉川国民学校（小学校）は全焼してしまいました。隣の吉野国民学校（小学校）に転校・復学しました。吉野小学校も校舎の大半は焼失していました。教室は3室だけ使っていました。1年生と4年生、2年生と5年生、3年生と6

年生がそれぞれ1つの教室を使って勉強しました。担任の先生は1教室に1人ずつで、計3人の先生がおられました。下級生は前方の黒板を使い、上級生は後方の黒板を使いました。先生が下級生を教えているときは、上級生は自習します。先生は掛け持ちで2学年の授業をしておられました。玉川小学校の集団疎開先は長い間、尾道市だと思っていましたが、最近、古い友人と話していたら福山市だったと言うことでした。玉川小学校は焼け跡に簡易校舎を新築し、集団疎開や縁故疎開をしていた学童を受け入れることになりました。自宅が全焼した家庭の児童は、復学できませんでした。私は、12月ごろに吉野小学校から玉川小学校に転校したと思います。

昭和21年(1946)4月に旧制北野中学校に入学しました。小学校6年生の夏ごろから、香住小学校で、お腹を空かせながら、豊岡中学校へ進学を目指して補習勉強をしていましたが、これが北野中学への受験勉強として役立ったと思います。昭和23年(1948)4月には6334制・

男女共学という学制改革により、大手前高等学校併設中学校3年生として[旧制大手前高等女学校]に転校しました。成人してからは、国家の復興、民主主義の定着を目指して、懸命に働きました。

今、多くの若い人達は、生きる目標を失い、不平不満を外に向かって吐き出そうとしています。少子高齢化の時代にふさわしい生き方を自ら探し求めて、絶えず努力してもらいたいものだと感じています。驚馬ではありますが、厳しい戦中戦後を乗り越えた経験と根性を次の世代の人たちに伝えて行きたいと念じています。

小林 登 (満73歳 翁)

日本基督教団西宮公会集會案内

早天祈祷会	毎月1日午前6時30分から	於：西宮公会集會室
教会学校	毎週日曜日午前9時から	於：西宮公会禮拜堂
聖日禮拜	毎週日曜日午前10時45分から	於：西宮公会禮拜堂
聖書研究祈祷会	毎月第1・3水曜日午後7時から	於：西宮北口西伝道所
読書会	毎月第2・4水曜日午後7時から	於：西宮北口西伝道所
ゆっくり聖書を読む会	毎月第3火曜日午前10時から	於：西宮公会集會室

彼もた どうかで私たをなほに 矛盾にのみた過渡期を
、その方法論を 模索 ぬが 生きた人間なのだ

(ルカ外コリスナール)

たとえば、ルカによる福音書 6 章 27 ~ 35 節と、37、38 節では“考えている”ことが、ずいぶん異なっているように読めます。27、28 節で「しかし、聞いているあなたがたに言う。敵を愛し、憎む者に親切にせよ。のろう者を祝福し、はずかしめる者のために祈れ」と言われていることと、37 節の「人をさばくな。そうすればじぶんもさばかれることがないであろう。」と比べたりすると、後者は平板に処世術を語っているように聞こえてしまいます。もちろん、全く平板ということではありません。37 節で“さばく”の基準として想定されているのは、出エジプト記、レビ記などで示される“戒め”であると考えられます。「だれでも父または母をのろう者は、必ず殺されねばならない。彼が父または母をのろったので、その血は彼に帰するであろう」(レビ記 20 章 9 節) の、その元になる戒めは、「あなたの父と母を敬え。これは、あなたの神、主から賜わる地で、あなたが長く生きるためである。」(出エジプト記 20 章 1 2 節) などであると考えられます。“敬いなさい”であった戒めが、それを破った結果“殺される

であろう”になったりするのは、過剰な反応といえなくはありませんが、古代の人たちにとって、父と母の存在の重さや意味が、そうであったとしたら、“殺されるであろう”は全くあり得ないことではありません。

そうした基準となる戒めがあって、ルカによる福音書 6 章 37、38 節のような考え方が示されることになりました。出エジプト記の戒めは、あるべきことがしめされるとしても、破った場合のペナルティが言及されることはありません。レビ記の場合のペナルティは、なかなか厳しいのですが、このレビ記を基準にする場合、ルカによる福音書の“さばくな”“罪に定める”などの言及は、戒めの意味や強制力が大幅に緩和されていることになります。単に緩和するというよりは、戒めの否定と言えなくはない内容です。というか、その社会が、戒めなるものの強制力、説得力を失っているとすれば、語られているのは処方術ということになります。

他方、ルカによる福音書 6 章 27 ~ 35 節で言及される身の処し方は、問うことも問われていることも処世術ではあり

得ません。“敵を愛し、憎む者に親切にせよ”“のろう者を祝福し、はずかしめる者のために祈れ”などで想像できる身の処し方は、処世術のようなものではあり得ません。取るべき態度として示されているのは、身をさらすことです。言及されているのは、基準となるような戒め、そしてそれを守るか守らないかなどのことではないのです。問題になっているのはその身をさらすように生きること、「あなたの上着を奪い取る者には下着も拒むな」(29節)と言い切ってしまう時、そこでは何一つ見返りは期待されていません。更に、基準らしきものがあって、その基準を満たす、ないしは越えるなどのことも論外ということになります。という具合に、言い切ることはあり得ることです。あり得ることですが、ルカによる福音書は、ここで修正を加えることにします。「・・・何も当てにしないで貸してやれ、そうすれば報いは大きく、あなたがたはいと高き者の、恩を知らぬ者にも悪人にも、情け深いからである。」(35節)。代償も、対価も、求めないはずだった振る舞いが、一転してそれを求める、均衡のとれた人の振る舞い、生き方のすすめになってしまいます。

こうして記述されていることから、垣間見えるのは、代償も対価も報いも一切求めないある生き方です。しかし、それが時間の中に置かれた時に、何か加わって、何か失われることに

なって様子が一変してしまいます。そうして加わった何か、失われた何かのことを、垣間見ることの出来るのが、ルカによる福音書6章27～35節、37、38節です。

(菅澤邦明)

はい、沖縄、暑いに決まっています。ただ暑いだけではなく亜熱帯ですから日本本土と紫外線の強さが違います。強烈に焼けるのです。南の人々は「怠惰」だ、といわれることがあります。けれども日中の1時や2時に歩く人はいません。歩くなら帽子、紫外線避けの長袖、サングラスと、かなり怪しいスタイルでなければ、逆にまちがいなく本土からの旅行者です。

えー、久しぶりに東京に3日間行ってきました。「知的障がい者施設」の集まりです。日本国中の施設から横浜にやってきて、ほぼ一方的な行政説明を聞かされるのです。昨年からはじめた「障害者自立支援法」によって、施設も存続の危機です。珍しく来賓挨拶にヤジが飛んでいましたが(私ではない)当然です。

で、久しぶりの東京をいいことに、久しぶりに会う人や「メル友」と初めて会うことにしました。初めて会うといってもいくつかの共通項があってまったく無前提に会ったわけではありません。共通項はキリスト教と年代でしょうか。特に私は関西人脈が中心の生活が長く、東京の地理は今でもよくわかりません。それぞれに楽しい時間を過ごすことができました。韓国関連では「新大久保」に行

きました。大阪の鶴橋とは違う雰囲気のコリアタウンです。留学生やビジネスマン、韓国語が飛び交っていました。ある店で軽食をと入るとほとんどソウルの裏道にあるような店で、あじゅま(おばちゃん)も、当たり前のように韓国語です。値段は、さすがに東京料金でしたが、ソウルで買いそびれたDVDを買いました。何年か前は違法ダビングで日本語字幕までついていたものさえ売られていたのですが、さすがに今回は見当たりませんでした。

6月、沖縄戦を考えるおりに、一枚の写真を手に入れました。撮影者は日系二世のジェームス・フルカワ氏。沖縄戦後、米海軍政府教育文化課に所属していた彼は、戦火で残った沖縄の文化財などを収集して現在のうるま市に「東恩納博物館」を整備したのです。仕事柄、膨大な写真を撮った中に、四人の女性が写っているものがありました。顔、まなざし、顎の特徴から沖縄人ではなく「朝鮮人」であることがわかります。つまり、「慰安婦」にされた女性たちです。彼女たちがどのような経路で沖縄に来たか、その後どうなったかは、残念ながらわかりません。

彼女たちの写真は、もちろん戦後撮られたに違いありません。髪はカー

ルされ、口紅もしているようです。つまり彼女たちは戦争中日本兵によって陵辱され、戦後は米兵の相手をさせられたのです。沖縄戦の研究は長く沖縄住民の被害を中心になされてきました。自分たちの悲しみは大きく、それを語るために何年も費やしたのです。けれども、朝鮮人に対する関心はあまりなく、軍夫とされた男性、慰安婦とされた女性たちと向かい合う余裕はありませんでした。1～3万人という沖縄戦時の朝鮮人、いや、その数さえ正確には計れないのです。写真の女性たちは、みな不安と疲労の表情で、二人は視線をはずしています。その表情にうながされて、「沖縄戦と朝鮮人」というテーマを追いかけてみたいと思います。雲をつかむような話なのですが、い

くつかの「点」を、「面」にしてみたいと思うのです。

昨年来、軍夫にされ沖縄に連行され奇跡的に韓国に生還した姜仁昌さんとも交流ができ、多くの名簿も頂くことができました。韓国の研究者からも、もう少し資料を集めて欲しいとの連絡があり、何とかまとまったものにしたいと願っています。

(沖縄・与那原・愛の園 後藤 聡)

夏の始まり

先日、今年初めて！のせみの声を聞きました。幼稚園の大きなケヤキの木を子ども達と見上げ、せみの声に耳を傾けながら、『ああ、夏がきたんだな』と感じました。園庭に大きな日陰を作ってくれて、時折吹く風を感じる、そんな時間が好きです。ぼっぼぐみの子ども達は、幼稚園にも慣れ始め朝の登園もスムーズになってきました。まず、登園してすることは“あさのごようい”です。出席ノートにシールを貼って、コッ

プを出して、タオルを出してリュックをかけます。今では自分で一つ一つ用意していますが、初めの一ヶ月はシールは自分で貼るけれど、その他はすべて補助の先生にしていたいていました。もちろん“おかえりのようい”も(あとはリュックを背負えばいい、という状態にまで用意してもらっているのです)。そんな“いたれりつくせり”から今では見違えるほど！もうすっかり自分で何でもできてしまう、共同っこです。

先日とても感激したことがあります。暑い日はシャワーを浴びたり、プールに入ったりしています。部屋に入ってきた子ども達がみんな集まると、着替えが入っているのでリュックを持っていずに座ってもらうのですが、その日は私が少し遅れて部屋に行くと～。。なんと、子ども達が既にリュックを持って座っているではありませんか！！思わずそばに居た先生に『リュックを持って座ってね～って、声をかけてくださいましたか??!!』って聞くと『何も言ってないよ!』と、先生。そうなんです、ぽっぼさんの子ども達、誰も何も言ってないのに自分でリュックを持って座っていたのです！当たり前のように、これって、本当にすごいことだと思います。私は感激して『みんなすごい！すごいね～!』って声をかけると、さっきまで何とも思ってなかっただろう子ども達が『ぼくもじぶんでよいしたよ～』『わたしもしたよ!』と口々に報告をしてくれました。幼稚園で過ごし始めて初めてづくしのぽっぼさん。いつも私達、教師の言葉に耳を傾けてくれているんなことが自分のできるようになりました。おともだちと一緒にだから楽しいこともたくさんあります。園庭で走り回り、スコップを持って砂場で山作り。『たんけんはいかが!』と幼稚園の裏を通ってぐる

りと一周。いつの間に!?!とびっくりするくらいお団子作りが上手になっていたり。そんなぽっぼさんの姿を見て、『うわぁ、じょうずにできたね』と声をかけてくれたのは年長ぐみのおともだちでした。形がまん丸でぴかぴかではないけれど、優しく声をかけてくれた年長さん。あなたたちも少し前はぽっぼさんだったのに～なんて思い見つめていたのですが、きっとぽっぼさんのところにそんな風に声をかけてもらっていたのかな～と感じました。子ども達同士の関わりに、ほんわかした瞬間でした。

こうして今年度が始まって約3ヶ月。初めはぴかぴかのぼうしだったのが、今ではそれぞれの“あじ”がでてみんなにぴったり似合っています。たくさんのお歌もうたえるようになりました。わらべうたも大好きです。7月に入り、さ～さにたんざくたなばたまつり～と、各クラスから聞こえてきます。みんなが楽しみにしているほしまつりまであと少し!たくさんの方々が子ども達の笑顔を思いながら準備を進めてくださっています。楽しみにしている子ども達がたくさんいます。私もとても楽しみです。毎日ドキドキわくわくでいっぱいのごとうようちえんが子どもも大人も大好きです

(三谷 春名)

私の出会ったいろんな人たち

先日、結婚され神戸多聞教会に移られた田中知恵先生が連載していたこのページを今月からいろんな人たちにリレーされていくことになったそうです。近くに住んでいる為が一番にお声がかかってしまいました。

私が西宮公会館に副牧師として就任したのは今から6年前のことです。2年間の契約でしたが、3ヶ月を残し、産休に入ったまま契約終了してしまいました（もうその時の子どもが4歳です）。

私はその頃、関西学院大学神学部に通う夫と小学校3年生の娘と三宮に住んでおり、ここの教会に通っていました。私から二人目の子どもをほしいが、仕事を辞められないという悩みをさんざん聞かされていた順子先生が「子どもを産ませてあげるからウチに勤めなさい」と言ってくれたのです！それが大きな決め手となったのか、家族でいろいろ悩んだ結果、私はここに勤めさせていただくことになりました。副牧師というものがどんな仕事をするものかを、引き継ぎを前任の山口先生から聞いてもちんぷんかんぷんでした。夫も牧師だしわからないことは聞いたらいいだろう、仕事を始めてみればわかるだろうと思いましたが、マン

ション管理、関西神学塾、障害児・者情報センター、出版事業、商店街など教会、教会学校、幼稚園の他にたくさんの事業！？があり、電話も多く、銀行回りも多く、目が回る早さで毎日が過ぎていきました、どうも他の牧師さん達とは違うようです。

勤め始めて約1ヶ月、その年も4月29日にカレーパーティーが行われました。勤め始めた感想を聞かれて「この渦(うず)を起こしている菅澤先生と順子先生は、人の倍の早さで動いているんですね。渦巻きなの中心は忙しく動いていないと、渦は回らないんですね」と言ったことを今でも覚えています。本当にそう思ったんですから…。毎日幼稚園のことだけではなく、あっちにこっちに飛び回るお姿を見てお二人の頭の中はどんな風になっているのかと…。菅澤先生は次々と原稿を出してきますし、馴れないパソコンにも取り組まれていました。あらゆる原稿のチェックは順子先生、菅澤先生の字が読めない時は浩三さん、教会学校などの活動には馬場田さんという助っ人がいてくれて、岡さんがイラストを描いてくれ、会計の心強い植田さんが登場し、教会員や幼稚園の先生やお母さんたちの力も借りて、(まつりには

教会学校の上級生が大活躍！)この事務所で仕事をさせていただいていました。

ここにいると人の情けがじ~んときます。手に負えない、もう無理！といった時に、どこからか、だれかしら、来てくれるのですから。そういう意味では正に神様が働いている場所なのではないでしょうか。

ドキドキハラハラの事務所生活、新しく始めた大平先生、女性の副牧師3代目ががんばれ~

(小林イブキ道江)

大切な贈り物・津門川 59

“川から海へ”

「津門川はどこにつながっているでしょう~？」園長先生の質問に「うみ~！！」と答えた年長ぐみの子どもたち、更に「その海をみたいか~？」に全員一致で「みたい~！！！！」
そうしてその日の散歩は始まりました。みんながいつも目にしている津門川が辿り着くだろう海を目指して下流へ、下流へ、歩き始めたのです。

「ほんまにうみまでいけるん？」どこまでいくんや~？」歩いて歩いても海までの道のりは結構遠く、何度も「もうあかん~・・・。」と弱音も聞こえてきました。でも、その度に

みんなを励ましてくれたのは川にいる生き物です。幼稚園の近くでは鯉が泳いでいたり、サギやカモがいたりしますが、下流に進めば進むほどボラが多くなっていき、甲羅干しをしているカメもたくさん目にすることが出来ました。どんどん川幅が広がって行って、いつもの津門川とは少し違って、みんなも「これ、つとがわ？」「どんどんおおきくなっていくなあ~！」って少しビックリ。流れもどんどん緩やかになって、流れているのかいないかわからないほど。だから時々立ち止まっては「海は

どっちでしょう～？」って『海の方
向』を確かめたりしました。川沿いに
歩いていても時々道がそれて川から
離れてしまう事もありました。でも
また川へ戻って「ちゃんとつとがわ、
あってよかった～」と一安心です。
共同幼稚園からこの日目指した海の
ある今津灯台までは直線にして3 .
1キロ、川は曲がり、それを辿って歩
きますから実際に歩く距離は更に～
です。暑くなってきたし、もう限界
～・・・「ほんまにうみにつくん～？」
「うみなんてないんちゃうん～」そん
な声も聞こえてきた時、実はもう海
は目と鼻の先のところまで来ていま
した。「あーっ！！なんか匂いが
する～！！」ククンしながらオー
バーに言うと・・・「ほんまや～！！
うみのにおい～！！！」「しおみた
いなにおい～！！」実は、そんなに匂
いはしなかったのに、不思議ですね～、
みんなが言うと、ほんとに海の匂
いがしてきたようでした。そんな一言
に足取りは一気に軽くなりました。
そしてそして、暫く歩いていた堤防
の壁がなくなると、目の前には
海！！出会いたかった海にやっと出
会えたのです。「う～みだぁ～
～！！！」「ほんまにうみにつな
がった～！！！！」あの瞬間の子ども
たちの表情といたら～。パッと輝
くその瞬間！そして海に向かって走
り出す姿、今までの疲れはどこへや

らです。空が映る海に「うみってあ
いなぁ～」「おおきいなぁ～！」って
ただただ海を目の前に感激 の子
もたちでした。小さな魚がいっぱい
泳いでいたり、アジサシが飛んでき
て魚を捕りに海に飛び込んでいく様
子も見ることが出来ました。「うみだ
よかわだよあおいなみずは～」波
打ち際を歩きながらだれからともな
く、いつもうたっているわらべうた
が聞こえてきたりもしました。

きっと子どもたちも海は今までも
見たことがあったと思います。でも、
みんながいつも目にしている津門川が
実は海につながっていて、みんなが
目にしている流れは海に流れ込んで
いる、その海を心と体で感じるこ
とが出来て、きっとこの日の海は今
まで目にしてきた海とは少し違っ
ていたはず。自分達で出会った海は津
門川がくれた海だったのですから。

「うみまでめっちゃとおかったよ
なぁ～」「めっちゃがんばってある
いたよなぁ～！」あの日を思い出
し、また津門川を覗き込む子ども
たち。川にはいつものように鯉やナ
マズがいて、カモがゆっくりと泳
いでいる、トンボがスイーっとな
飛んできて、いろんな植物も育っ
てる。だけどあの日以来、それ
までとは少し違う津門川がみんな
の中に、私の中に、流れている
様な気がしています。

(石堂 寛子)

2007年7月 あんなこと こんなこと...

- ・7月 1日(日) 午前6時30分～、早天祈祷会
- ・7月 3日(火) 午後5時～、七夕たそがれコンサート
場所：西宮共同教会チャペルホール
- ・7月 7日(土) 午後5時～、星まつり
- ・7月 10日(火) 午前10時～、ゆっくり聖書を読んでみませんか
- ・7月 15日(土) 午後5時～、“自由と平和”リピート山中と仲間たちとクラボミニコンサート(別紙参照)
- ・7月 28日(土) 午後3時～、“映像MATSUTANI 1完成記念上映会&松谷武判トーク会”

にしきた商店街...

- ・7月 1日(日) 午後12時30分～“津門川掃除”
- ・7月 14日(土) 午前10時～午後5時30分、“笛と笛の物語”
- ・7月 21日(土) 午後1時～午後2時、“魔笛を聞こう!の会”
- ・7月 21日(土) 午後4時～午後5時半、
第1回にしきた音楽祭ストリートミュージシャン
コンテスト入賞者コンサート“Music is Cool”

アートガレージ

- ・7月 3、17日(火) 野菜市

関西神学塾

- ・7月、8月は関西神学塾はお休みです。
- ・田川建三『新約聖書・訳と註 第3巻パウロ 書簡その1』7月発行。購入をご希望の方は教会事務所(菅澤)まで。
- ・8月日20、21日「教会と聖書」編集委員会との合同合宿

7月14日(土) 午前10時~午後5時30分

「笛」を通して人が“集まる”“つながる”“深まる”『笛と笛の物語』

オペラ「魔笛」にちなんで、“笛”をテーマにした商店街・アクタ西宮でスペシャルコンサートを開催します。リコーダーを持って参加してください!

フルート演奏：森本英希

- ・Part 1 『ヒマラヤのふえ』の物語 (FAXにて要予約)

場所：フェリーチェサロン (フェリーチェ音楽院)

入場料：無料 定員：50名

- ・Part 2 『ハーメルンの笛吹き』の物語

場所：にしきた駅前公園 **雨天時は西宮公会堂チャペルホール**

- ・Part 3 『うさこちゃんとふえ』の物語

場所：シオサイ 入場料：500円 定員25名

FAX申し込み先 0798-63-4044

7月21日(土) 午後4時~5時30分

第1回にしきた音楽祭

ストリートミュージシャンコンテスト入賞者コンサート

“Music is Cool”

今年4月に開催されたコンテストの入賞者3組がアクタの円形デッキに再び集結します。コンサートの最後はおなじみ「春の唄」を出演アーティストによる演奏でお届けします!

場所：アクタ西宮円形デッキ **雨天時は西宮公会堂チャペルホール**

7月28日(土) 午後3時~

MATSUTANI 1 完成記念上映会&松谷武判トーク会

現代美術家、松谷武判氏のパリ在住40周年を記念して作られた映像「MATSUTANI 1」の記念上映会、トーク会が行われます。西宮、東京、屋島で連続して行なわれるイベントの第1会場回目の会場が西宮公会堂チャペルホールです。松谷武判氏は1937年大阪市阿倍野区生まれ。1966年にフランス政府留学生選抜第一回毎日美術コンクール(京都市美術館)でグランプリ受賞以後、現在までパリを拠点に活動を続けています。現代美術の普及・振興に貢献したとして西宮市民文化賞を受賞し、現在パリと西宮(丸橋町)に住まいと工房を持ち創作活動に励まれています。

場所：西宮公会堂チャペルホール 参加費：2000円

映像上映：「MATSUTANI 1」(15分)

アーティストトーク：松谷武判「パリ40年」(20分)

トークセッション：松谷武判：松谷武判を囲んで「映像とアート」(20分)~ 歓談

教会学校から

《6月の活動報告》

6月3日(日)
クリーン大作戦

6月10日(日)
花の日合同礼拝

6月17日(日)
お父さん”出番”です
お父さんと一緒に“グリムの絵本”を
楽しむ

6月24日(日)
作って遊ぶ
“吹き矢で遊ぶ”

《7月の活動予定》

7月1日(日)
作って遊ぶ
”スライム作り(星まつり用)”

7月8日(日)
作って食べる
”カキ氷を作って食べる”

7月15日(日)
ちょっといいこと
”プール遊び”

7月22日(日)
キャンプ・ソングの練習

7月29日(日)
キャンプ・ソングの練習

今月のあ・そ・び “めだか”

幼稚園で、そして教会の玄関でめだかを飼っています。教会の玄関のメダカが泳いでいるのは石臼の水槽です。めだかは神戸女学院大学のピオトープ池で、人間科学部の学生や先生が世話していて、幼稚園の子どもたちと出掛けてもらってきました。その時のめだかが産卵して、小さな小さなめだかが、少しずつ育っています。“和めだか”は西宮市環境課の人たちが、市内で見つけて繁殖させ、市内のあっちこっちで育てています。神戸女学院大学の和めだかも、そのめだかです。

6月の第9回の津門川塾では、西宮市環境都市推進グループの阪本義樹さんが、市内での和めだかの発見、それを繁殖させ、さらに市内のあっちこっちで育つようになった経緯を報告しました。神戸女学院大学人間科学部水圏環境科学研究室の山本義和先生、学生の大枝かおるさん、北井秀美さんが、大学構内のいくつかの場所で、西宮市から譲り受けためだかを育てた経緯、育つ様子の研究発表をしました。

6月9日の津門川塾の津門川塾の当日は、希望者にはめだかをもち帰ってもらうという案内が新聞に掲載されたこともあって、参加者も多く好評のうちめだかたちは、旅立っていきました。

希望される方には、西宮産の“和め

だか”を、差し上げています。めだかの飼い方については、西宮市の発行している詳しいパンフレットがあります。また、簡単なパンフレットを、神戸女学院大学の学生と西宮共同幼稚園の先生の協力で作成しました。

めだかを飼うにあたって、水槽など一式を用意してもらうことになりましたが、水と水槽は“自然”のものを使っていただくことが出来ます。水は水道水ではなく、地下水をくみ上げたものを用意しています。水を追加したり、取りかえたりする時に、カルキ抜きなどをしなくても、そのまま使えます。津門川に自生している“オオカナダモ”を水槽にいれてやると、めだかはそのあたりに卵を産み付けたり、隠れたりしています。オオカナダモも、津門川から採取したものが使えます。めだか、地下水、オオカナダモ、そして「野生めだかの飼い方」のパンフレットをご希望の方はお申し出下さい。

津門川塾のこと

津門川塾は、西宮公会堂の前に流れる川のことを、街の人たちが学習する集まり。主催は、地元5つの自治会、2つの商店街、津門川の自然を守る会、神戸女学院大学人間科学部、西宮公会堂・西宮共同幼稚園。年に3～4回、西宮公会堂集会所を会場に開催。

まいのなんでも案内

どもー！すっかり暑くなってまいりましたが皆様いかがお過ごしでしょうか。人は皆自身が生まれた季節に強い、なんてウワサに従えば、私夏には超強いはずなんですけど・・・(我が誕生日はお盆真っ盛り)確かに夏バテはしないものの、肌は日焼けしやすいわ汗っかきなせいで朝晩シャワーしなきゃだわ薄着で体型がヤバいの目立つわ、色々大変です。まあそれより大変なのは来週のスケジュールで、大切なレポート提出、語学のテスト、ゼミ発表が一週間に凝縮されてるんですねえ・・・うきゃー！あと祇園祭もあるし。今年も浴衣着て行きたいけど・・・行けるのかな(汗)。というわけで、今回は紹介をサボって、エッセイ的なもので許していただきます。申し訳ありません。こんないい加減な連載でも、たまーに「読んでます」という声を聞きまして、嬉しいやら恥ずかしいやら、もっとちゃんと読ませる文章を書こう、と思うのですが「ギリギリ極限までやらずにちゃいけないコトを始めない性格」が祟って、いつもやっつけ仕事になってしまってます。

あ、先月お話ししましたシナリオリーディングコンテストですが、見事3位を獲得しました！勿論それだけで済ませられるようなことではな

いんですけど、話し出すとまとまらなくなるので・・・。ただ、人の縁ってすごいものだな、ということと、偏見を持つのは良くないな、ということ漠然と感じさせられました。元々私がそのコンテストに出たのは、ただ友達の縁、でだけで、8人いるメンバーの中には、何となく、馴染めてなかった子もいたわけです。でも、話していくうちに、どんどん(精神的な)距離が近くなるのが自分でも分かって、最終的には二人でご飯食べに行くまでになりました。同じ舞台を一緒に作り上げたことによる一体感、親近感、というのは勿論ありますが、それだけじゃなくて、そのことをキッカケにして、今後につながる関係が築けたかなぁと思います。

人と人とのつながりって、すごく難しいですね。距離とか温度とか相性とか立場とか。人間だったら多面性があって当然で、しかも大抵の場合それを無意識に使い分けて生活してると思うんです。そうじゃない人もたまにいますけど、本当は「そうじゃないように見えてる」ってだけの話かもしれない。心持ち一つで、自分が他人に与える印象なんてどれだけでも(てのは言い過ぎか)操れるし、自己暗示ってこと考えたら、自己意識だって変わる。でもそれはすごく

難しく、そもそも自分のことって自分が一番分かってるようでやっぱり一番分かってない。他人から「こう見えてる」って言われて驚くこともしばしば。「自分がされて嫌なことは他人にするな」って言うけど「他人が皆自分と同じように考えたら思ったら大間違いだ」とも言えるから、どれだけ相手を思いやってるつもりでも結局は自己満足だったりする。他人とある程度以上関わろうと思ったら、そういうことを考えることは避けられなくて、それが面倒だから、ある程度の距離を取って付き合うっていう手もあるけど、全ての関係においてその姿勢を貫くのもどこか淋しい気がします。

うーん、気軽に書くつもりが結構真面目に書いてしまいました。しかも相当偉そう(苦笑)。まあ、まだ「若気の至り」という言葉が通用する年齢らしいので、守りの姿勢には入らないでいこうと思います！それでは。

(高橋 舞)

つとがわ 編集後記

“星まつり”の15mを越える竹には、1000枚を越える願いが書かれた短冊が結ばれません。雨と風の翌日には、ほとんど短冊は落ちてしまいます。短冊は、メッセージを印刷したりする為、紙を使ってきました。その紙も、雨・風に強そうなものをいろいろ工夫してきましたが効果はありませんでした。今年は“雨にも負けず、風にも負けず”を優先して薄いビニールコーティングされたものを用意してみました。結局風対策で、糸を結ぶ穴に“パンチ穴補強パッチ”が必要になりました。更に、メッセージが印刷できない為、別にベニヤ板製の短冊を用意することになりました。以下その短冊に書き込んだメッセージです。

百千の 希みを記した 七夕の
星からの手紙 君凝視せよ

雨風に 千切れ千切れた 七夕の
幼き人の希み 踏みにじるなよ

星に書いた 蟻の背に書いた 七夕の
見えぬ希みを 聞かねばならぬ
(K)

先日淡路島のワークキャンプに初めて参加しました。草まみれ、泥まみれになりながらも、体を動かしてとても気持ちのいい汗をかきました。バッタやヘビ、ムカデなど自然にもたくさん出会えて、すごくいい体験でした。

(Y2)

平安荘へは年長の子どもたちと1度だけ行ったことがありました。ワークキャンプに参加させていただくのは今回が初めてでした。虫が苦手な私はバッタやカマキリなどたくさんの虫たちにそして草の多さにびっくりしてしまいました...草を刈った平安荘すつき

り！とても気持ちよかったです！なんだか気分もスッキリ～！しました。

(N)

先日、祖父に会いに行ってきました。私の祖父は畑でいろんな野菜を作っていて、その日も畑にいました。甥っ子も一緒だったので、畑をチョコチョコ動き回って祖父と遊ぶ甥っ子の姿、嬉しそうに野菜を穫る姿に昔の自分がそこにいるような気がして懐かしくなりました。幼い頃の私は兄と一日中そこにも退屈する事なく遊んでいたのを覚えています。

小さくなった祖父の背中を見つめながら、昔の自分に出会える場所が残ってるなんて幸せだなぁと思いました。

(I)

施設にいる二人の父に2月から“絵手紙”なるものを届けています。一言添えて、一週間に一度と思っているのですが、今のところ2週間に一度くらい。

反応はわかりませんが、心を寄せる一つの手立てとして、そしてキーワードは変化と刺激です。

「ハーイ おてがみよ」なあんて部屋に届けに来る人がいる。それが大きいと思っています。そして訪れた折、引き出しや洗面台やあちこちに入り込んでいるそのハガキを、日付順にハガキファイルに納めています。

(J)